夜明けの街

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜明けの街

【Ｎコード】
Ｎ６３０６Ｍ

【作者名】
さら

【あらすじ】
結婚を間近に控え、幸せいっぱいだったなつき。しかし婚約者の史生が事故に遭い、記憶をなくしてしまう。初めてのキスも、プロポーズの言葉も、どうしても思い出せない史生と、それを思い出して欲しいと願うなつき。ふたりはもう、元の恋人同士に戻ることができなくて……ちょっと切ないラブストーリーです。

1

その日の私は幸せだった。
片手に小さな花束を抱え、もう片方の手にはちょっぴり奮発して買った赤ワインをぶらさげ、商店街をニヤニヤと歩く。そんな私は他人から見れば、少しおかしいほどだった。
夕暮れの空はオレンジ色に染まり、買い物客で賑わう店先からは、焼き鳥のほのかな匂いが漂ってくる。焼き鳥にビールでもよかったかなと、今夜の夕食のメニューをちょっぴり後悔しながら、私は少し足を速めた。
史生はもう帰っている頃だ。今日は出張先から直帰して、先に夕食の支度をしてあげると言っていた。
「何が食べたい？」
史生の質問に私は「ビーフシチュー」と答えた。
史生の作るビーフシチューは、とてもいける。幼い頃に母親を亡くし、その後ずっと自分で食事の支度をしてきたという史生にはたくさんのレパートリーがあったが、その中でもこのビーフシチューは格別だった。
「それじゃあ帰りにワインでも買ってきてよ。ビーフシチューに赤ワインでパーティでもしよう」
『パーティ』という言葉にワクワクしながら、私は史生に聞いた。
「何のパーティ？」
史生は少し考えてから答える。
「俺がマスオさんになる前の、独身サヨナラパーティ」
「何それ」
と笑いながら、私は座っている史生の背中にもたれかかった。
「史生。マスオさんになるの、イヤじゃない？」
史生は後ろを振り向き、私に笑いかける。
「イヤじゃないよ。なつきの家族とあの台所でメシ食うの、すごく

楽しい。俺、家族の団欒って憧れだったから」
私は子供のような笑顔でそう言う史生をとてもいとおしく感じ、肩越しにそっとキスをした。
見慣れた史生のアパートの窓から、夏の始まりの匂いが漂ってくる。私のキスに答えるように史生は私を抱きしめる。私たちはその唇でお互いの愛を確かめ合いながら、もつれるようにその場に倒れた。
「同居したら、こういうのもおあずけ？」
私の顔を見下ろしながら史生が言う。
「そんなことないよ。いっぱいキスしていっぱい抱き合おう」
「スケベが」
史生は笑っていつものように私の首筋にキスをした。それはこれからふたりが体を寄せ合う、始まりの合図のようなものだった。

「なつき！」
突然私の背中に聞き慣れた声が響いた。振り返りきょろきょろとあたりを見回すと、横断歩道の向こうで史生が手を振っていた。
「どうしたの？」
赤い歩行者信号の下に立つ史生に向かって、私は身振り手振りで聞いた。歩道の両側に立つ私たちの間には、何台かの車が行き来している。
「肉買うの忘れてた」
史生が苦笑いしながらミートショップの袋を掲げる。ビーフシチューを作るのにビーフを買い忘れるやつがあるか？史生はしっかりしているようでどこか抜けているのだ。しかしそんな不完全さが、私の母性本能をくすぐっているのだが……
私は目の前の信号をじっと見つめる。早く青に変わらないかとワクワクしながら史生を待つ。
「バカねぇ。お肉忘れてどうするのよ？」
史生が来たらこう言ってから、このワインのビンを持たせよう。

そして空いたこの手で史生の腕を抱いて、ふたりべたべた寄り添って歩こう。
アパートまであと5分。着いたらお花を飾って、ふたりだけでささやかな結婚前のパーティをするのだ。
歩行者信号が青に変わる。並んで立っている人の群れから、史生が1番に飛び出す。青になるのが待ちきれなかった子供みたいだ……私が史生を見て小さく笑った時、1台の車が横断歩道の中に突っ込んできた。

1（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。

ずいぶん前に書いたお話ですが、きまぐれに投稿してみました。
不定期更新になると思いますが、暇つぶしにでも読んでいただければ幸いです。

よろしくお願いいたします。

2

「史生くんは……元気？」
暖かな店内でミルクティーをかき混ぜながら、妙子が少し言いにくそうに言う。私はクリスマスイルミネーションが光る街並みから目をそらし、妙子に笑いかけた。
「元気だよぉー。とても死にかけた人間とは思えない」
私の言葉に妙子は笑わなかった。そして大きくてまつげの長い瞳をかすかに潤ませ、私に言った。
「まだ、わからないの？なつきのこと」
私は小さく笑って答える。
「そうだね。まだ思い出せないみたいだね」
私が言うと妙子は泣き出しそうな表情をした。私はあわてて大げさなほどの笑顔を作る。
「でもね、そういうのってふとしたはずみで思い出すそうだから。お医者さんもあせらずゆっくり待ちましょうって言ってるし。それに記憶喪失の彼氏と付き合うなんて経験、めったにできるもんじゃないしね」
私はそう言ってコーヒーを飲む。妙子はまだ不安そうな顔で私を見ている。
中学時代からの親友である妙子は、いつだって私のことを、まるで自分のことのように心配してくれた。だから私の婚約者である史生が事故に遭い、生死の境をさまよっていると聞いたときは、思わず気を失って倒れてしまったほどだ。目の前で事故を見た私でさえ、倒れるということはなかったのに……いや、倒れている場合ではなかったからかもしれないが……
その時テーブルの脇のガラス窓をこつこつと叩く音がした。
「あ、史生くん」
妙子の声に、私がコーヒーを置いて振り向く。歩道の並木に彩ら

れたイルミネーションの光を受けながら、史生が笑顔で立っていた。
「妙子ちゃん、いいの？」
１２月の薄暗くなった夕暮れ、人ごみの中に消えてゆく妙子の背中を見送りながら、史生が言った。
「うん。おばさんと待ち合わせしてるんだって、駅前で」
「ふーん」
ぼんやりと人ごみを見つめている史生の腕を、私はそっと抱きしめた。
「行くでしょ？うち」
「うん」
「お母さん、久しぶりに史生が来るから、張り切って夕飯作ってるよ」
私はそう言って史生の顔を覗き込む。史生は私を見て、少し戸惑ったように笑った。

半年前、交通事故で頭を打った史生は、最近の記憶をなくしてしまった。よくいう記憶喪失ってやつ。しかし古い記憶はしっかりと残っている。
５歳で母親を亡くし、１２歳で父親を亡くし、その後親戚中をたらいまわしにされて、高校卒業と同時に就職して家を出た。そのあたりまでははっきりと覚えている。しかしその後の記憶が消えているのだ。
私と出会って、付き合って、キスをして、抱き合って……結婚の約束までしたこの数年の記憶が、きれいに削り取られてしまったのだ。
事故による一時的なものだろうと、担当の医師は言った。きっと何かの拍子に思い出すだろうと……しかし本当にそうなのだろうか。史生にとって私は忘れてしまいたかった存在であったのではないか……事故で婚約者を失いかけて、看病に疲れ果てた私は、そんなナ

ーバスな考えをよくしたものだ。
しかし最近は違う。記憶がなくたって史生は史生だ。私は今、こうやって史生と腕を組んで歩けることを、心から幸せに思っている。

3

「どうかしら？私の作ったミートローフ」
オレンジ色の灯りの下で、私の母が少し不安そうに史生に尋ねる。
「おいしいです。すっごく」
「本当？よかった」
母は若い娘のように頬をピンク色に染めて微笑む。
「お母さんてば、史生くんに好かれようと思って、がんばっちゃってさ……史生くんはお姉ちゃんのものなのに」
高校生の妹あずさが、ニヤニヤ笑いながら母を見る。
「何言ってるのよ、あずさ！そんなことは当たり前じゃない！ああ、もう、何言ってるんだか……」
母がおろおろしながら冷蔵庫からビールを取り出す。父は笑顔でそれを受け取り、史生に向かって差し出した。
「史生くん、どうだ？1杯」
「あ、どうも。いただきます」
史生がにっこり笑って、自分のグラスを父に向けた。
お酌をする父と、それを受ける婿となる男。母は自慢の料理を次々とテーブルに並べ、妹は「遠慮しないで」と言って史生の皿に料理をとる。
私はぼんやりとそんな我が家の食卓を見つめる。淡い灯りの下でおいしい食事を囲む温かな家庭。史生がいつも憧れていた、家族団欒の光景だった。
しかし私は感じていた。史生はこの光景に戸惑っている。顔では笑顔を作っているが、その笑顔は本物ではない。やはり記憶が戻らないまま、この家庭に入ることは無理なのだろうか……
アパートへの帰り道、私は史生の腕を組んで歩きながらこう言った。

「無理しなくてもいいからね？」
澄んだ真冬の夜空には、白い月がぽっかりと浮かんでいる。史生はそんな月を見上げた後、寒そうに息を吐きながら私に笑いかけた。
「無理なんか、してないよ」
バス停まで続く歩きなれた道。この道を史生と一緒に何度歩いたことだろう。
「ただ、俺のせいで結婚式キャンセルになっちゃったり……いろいろ心配とか迷惑かけて……」
「そんなの、みんな気にしてないよ？」
私は笑って史生の顔を覗き込む。
「結婚式なんていつだってできるしさ。私は史生の記憶が戻るまで気長にのんびり待ってるよ」
「ごめんな……なつき」
史生はそう言うと、また空を見上げた。「ごめんな……」あの事故の後、何度史生の口からこの言葉を聞いたことだろう。
私は史生と一緒に空を見上げる。今夜の月はどこか物悲しい。私がこうやって史生と一緒にいることは、史生にとってつらいことなのかもしれない。私は無意識のうちに「早く私のことを思い出して」とプレッシャーを与え続けているのだ。
「それじゃ、また」
バス通りに出る前の狭い路地で、私たちは別れた。
付き合い始めてからずっと、この場所でしてくれたおやすみのキスを、もう史生がしてくれることはなかった。

4

「今夜仕事帰りにうちに寄りなよ。何かメシ作っておくから」
その日の史生の電話の声は、いつもより少し明るかった。しかし私はなぜか、史生とふたりきりになるのが怖かった。
「ごめん。今夜妙子と会う約束しちゃったの」
「またふたりで飲み会？」
携帯電話の向こうで史生が笑う。私もファーストフード店のポテトをつまみながら、小さく笑った。
「じゃあさ、妙ちゃんも連れてきなよ。うちで飲み会しよ」
「ええー？いいのー？」
「いいよ。俺ヒマだし……」
病院を退院した後、史生は会社に復帰したが、どうしてもその仕事内容と人間関係を思い出すことができず、会社を辞めてしまった。
私はそれでもいいと思った。無理をしてまで元の仕事を続ける必要はない。史生は遅かれ早かれ会社を辞めて、私の父の工務店で働く予定になっていたからだ。
「なつき、何か食べたいものある？」
私の頭に史生のレパートリーが広がる。
史生の料理の腕は落ちていなかった。幼い頃の記憶はちゃんと残っているし、たとえ頭で忘れたとしても、体が覚えているだろう。史生は私のようにレシピなど見なくても、材料を見ただけでパパッとおいしい料理を作ることができるのだ。
「ビーフシチュー……」
私の口から自然とその言葉が出た。
「シチュー？つまみにならないじゃん。ま、いいけど」
史生がそう言って笑う。史生の頭にあの日の記憶はない。私と一緒にパーティをするはずだった、あの夏の始まりの日。私は一生忘れられないというのに……

「史生くんって、本当にお料理上手なのねぇ」
ビーフシチューを食べる妙子が、ただでさえ大きな目をさらに大きく開いて、感心したように言う。私は笑って自分のことのように自慢した。
「でしょー？特に史生のビーフシチューは絶品なのよ。ね、史生？」
「うーん……」
史生は少し照れたように笑いながら、妙子のグラスにビールを注いだ。
「何かおいしく作る秘訣でもあるの？」
妙子の言葉に史生が答える。
「肉にね、ちょっとした秘密があるんだ。別に高い肉使ってるわけじゃないんだけど」
「へえー何それ？私にも教えてよ」
私がそう言ってテーブルに身を乗り出す。
「俺、なつきに話してなかった？」
「うん。話してないよ」
「そう。じゃあ秘密」
「なによー、ケチー」
私は笑って、わざと史生のグラスをビールでいっぱいにした。史生はあわててグラスに口をつける。
「おい、あふれるだろっ」
「あ、史生くん、こぼれてるこぼれてる！」
妙子がさりげなくタオルを手に取り、史生の服を拭いている。
「まったく……何すんだよ、この酔っ払いがぁ」
史生の声に妙子が笑っている。私も酒がまわってきたこともあり、史生を見ながら大声で笑った。そして心の中で史生を試した自分を軽蔑していた。ビーフシチューの秘密は前にも聞いたことがあったのだ。

「何？そのお肉の秘密って。私に教えてよ」
あれは忘れもしない去年の冬。せっかくの日曜日だというのに私は熱を出して、史生のベッドで1日中ごろごろしていた。そんな私に史生がとっておきのビーフシチューを作ってくれたのだ。
「知りたい？」
「うん、知りたい」
ベッドの上で温かいシチューを食べながら、私はじっと史生を見た。史生はそんな私の頭をくしゃっとなでて「じゃあ結婚しようか？」と言った。「一緒に住めば、そのうちわかるよ」
それが史生のプロポーズの言葉だったのだ。

「なつき？もしかして泣いてる？」
あまりにも笑いすぎて涙をこぼしている私を見て、妙子が少し不安げに言った。
「あはは、笑いすぎ。ちょっとトイレね」
私はそう言って立ち上がる。史生がじっと私のことを見つめているのがわかる。
私は涙が止まらなかった。
史生に思い出してほしかった。すべてを思い出してほしかったのだ。

5

その日からなんとなく、私は史生のことを避けていた。
「何やってるの、お姉ちゃん？史生とケンカでもした？」
よく晴れた日曜日の朝、台所のテーブルでぼんやりと座っている私に、妹のあずさが言った。
「私が何しようが、あんたにはカンケーないでしょ？」
私はすねたふうにそう言って、手近にあった新聞紙を広げる。
「あ、なっちゃん。今夜史生くん呼んだら？お鍋にしようと思ってるんだけど」
庭仕事を終えた母が、台所を覗き込んでニコニコ笑う。
私は何も答えなかった。母が記憶をなくした史生と、そんな婚約者を持つ私に、とても気を使っているのはよくわかっていたのだが……するとあずさが私の目の前に腰をおろし、ポツリと言った。
「私昨日、史生見ちゃったんだけど」
黙ったまま、私は新聞紙から顔を上げる。
「お姉ちゃんの友達の……妙子ちゃん。あの人と歩いてた」
私はぼんやりとあずさを見つめつぶやく。
「めずらしい組み合わせね」
「のん気なこと言ってていいの？史生ってば笑ってたんだよ？」
私の頭に妙子と史生の笑顔が浮かぶ。
「なんだか楽しそうにさ。最近の史生、うちに来たってあんなに楽しそうに笑わないくせに」
あずさは少し不機嫌な顔をしてそう言うと、立ち上がり台所を出て行った。
私はまたテーブルに目を落とし、パラパラと新聞紙をめくる。しかしそこに書かれた重大ニュースも、今夜のテレビ番組も、私の目には入ってこなかった。ただ私の大好きだった史生の笑顔が浮かんでくるだけだった。

その日の午後、何もする気がなくごろごろしていた私に、史生から電話があった。
「なつき、今何してる？」
「今？別に何もしてないけど」
「天気いいからさ、どこか行かない？」
電話の向こうの史生が言う。私はぼんやりと窓の外を眺めた。気持ちよいほど青い空に、真っ白な雲が所在なさげに浮かんでいる。なんだか行き場のなくなった私みたいだ。
「うーん……なんだか今日は出る気がしなくて」
私の返事に史生は少し黙り込み、やがてポツリとこう言った。
「ごめんな……なつき」
私の耳に史生の声が響く。
「俺、ホントにみんな忘れちゃってて……知らないうちになつきのこと、傷つけたりしてるんだろうな……」
「そんなことないよ」
そう言って私は涙をこすった。いつの間にか涙があふれて止まらなかった。傷つけているのは、私の方ではないかと思った。
「史生、やっぱり私そっちに行ってもいい？」
「うん……いいけど」
「今から行くから。部屋で待ってて」
私はそう言って電話を切ると、ジャケットをはおって家の外へ飛び出した。

いつものバス停からバスに乗って、史生の住むアパートの近くで降りる。商店街を駆け抜けて、子供たちの遊ぶ公園を横切ると、やがて見慣れたアパートが見えてくる。そしてその階段の1番下に、ぼんやりと座っている史生の姿を見つけた。
「史生！」
私が叫ぶと、史生は小さく微笑んで立ち上がった。見慣れたいつ

ものトレーナーに、少しよれたモスグリーンのジャケット。その姿は1年前と変わらない、私の好きな史生のままだった。

「なつき……」

史生の胸に飛び込み顔をうずめた私に、史生は少し戸惑っているようだった。史生の前では泣かないと誓ったはずなのに、今日も私は泣いていたから……

6

「この日ね、ふたりで海に行くつもりなんてなかったの。でもお互いなんとなくむしゃくしゃしててね。私は前の彼と別れたばかりだったし、あんたは会社でムカつく上司にいびられてたし……それで行くあてもなく電車に乗って、気がついたら海に来てた」

午後の日差しを背中に浴びながら、私は史生とベッドに座って、懐かしいアルバムをめくっていた。アルバムの中の私たちは、こんな運命が待っているとも知らずに、無邪気な笑顔ではしゃいでいる。

「気がついたら海にいたなんておかしいよ」

史生はアルバムの写真を見ながら小さく笑う。

「俺はきっとお前のこと狙ってたんだよ。だからわざと海に向かう電車に乗った」

「そうだね。それで私もとぼけたふりして史生の計画に乗っちゃったんだ」

史生の言葉に私も微笑む。

「だって付き合ってもいないのに、その日のうちにキスしちゃったんだよ？私たち」

史生は私を見ておかしそうに笑った。私は史生のこんな笑顔が好きだった。前の彼氏と付き合っている頃から、実は史生のことを想っていた。そして史生も、きっと私を好きだった。

「ねえ、史生」

私はアルバムを見つめたままつぶやく。

「私のどこを好きになったの？」

史生は黙って私を見た。胸の鼓動が激しくなる。それ以上言ってはいけない。言ったら終わりだ……私の頭のどこかでそんな声が聞こえる。でも私は言うしかなかったのだ。

「ホントに覚えてないの？私を好きになった日のことも、初めてキスした日のことも」

史生は何も言わずにうつむいた。「ごめん……」今にもその言葉が聞こえてきそうだった。
「史生……」
私は隣に座る史生の手をぎゅっと握りしめた。大きくて温かい、いつも私を抱きしめてくれた史生の手……
「私たち別れよう？そのほうがいいよ。史生だって覚えもない女と付き合うのなんて、キツイでしょ？」
史生は何も言わなかった。私は史生の手を握りしめたまま、にっこり笑った。
「ね、そうしよ？私、あんたはあの事故で死んだと思うことにするから。だからあんたも私のことなんか忘れて、また新しい彼女探しなよ？」
私はそう言って史生の顔を覗き込む。史生はそんな私から目をそらすようにうつむいていたが、やがてかすれる声でつぶやいた。
「ごめん……なつき……」
私は黙って首を横に振る。もう史生の口からその言葉を聞きたくはなかった。
「じゃあ私、帰るね」
私は史生の手をそっと離すと、それだけ言って外へ出た。いつの間にかあたりは夕日に染まり、オレンジ色の空が私の上に広がった。
私は振り向かないで歩く。しかしたぶんきっと……史生は私の背中を見送っていることだろう。私たちがキスをして抱き合ったあのアパートのドアの前に立って、好きでもない婚約者の私を見送っているのだろう。
これでいいのだ。史生はもう私のことを好きではないから。いつ私を好きになったのか、私のどこを好きになったのか……そんなことも思い出せない史生と私は、恋人同士でも何でもない。
ふたりは付き合う前のふたりに戻ってしまったのだ。

7

「あー、妙子ー。やっと来たぁ」
「なつき!?どうしちゃったの?」
史生とよく来た、マスターとは顔なじみのバーで、私はカクテルやらウイスキーやらを浴びるほど飲んで、妙子を電話で呼びつけた。あれ?どうして妙子を呼んだんだっけ?するとマスターが困ったように妙子に言った。
「妙ちゃん頼むよ。やけ酒だかなんだか知らんけど、なっちゃんちょっと飲みすぎだからさぁ」
「何言ってんのよ、マスター。あんたの店が儲かるように、私が飲んでやってるんじゃない!」
マスターは酔っ払いを見るような目で私を見て、あきれたようにため息をつく。まったく失礼な店主だ。酒を飲ませる店のくせに、飲みすぎだとか何だとかケチをつけるとは……
「なつき。史生くんと何かあった?」
妙子がそう言って私の隣に腰掛ける。そうだ、そうだった。私は妙子に聞いてほしくて呼んだのだった。
「私ね、史生と別れたのよー」
私の言葉に妙子の顔色が変わる。泣くかな?私は思った。
妙子はいつだって、私のことを自分のことのように心配してくれる。これほど心配かけてばかりの私も問題だが……そんな時、泣き出しそうな顔の妙子を見て、私は頑張らなくちゃと立ち直ることができるのだ。
史生が浮気して私と大ゲンカした時も、あの事故が起きた時も……私は妙子のおかげで立ち直ることができた。
しかし今夜の妙子は少し違っていた。私の目をまっすぐに見て「どうして?」と聞いてきたのだ。私は妙子の意外な反応に、女のカンのようなものが働いた。

「だって史生って、私と付き合い始めた日のことも、初めてキスした日のことも、プロポーズした日のことも、ぜーんぶ忘れちゃってるんだよ？さすがの私もちょっとキツイよ」
「でもそれは史生くんのせいじゃないでしょ？1番つらいのは史生くんなんだよ？」
妙子は必死に反論してきた。やっぱりそうか、と私は思った。
「そんなの私だって、妙子に言われなくてもわかってる」
「じゃあどうして別れたりするの？なつき言ってたじゃない。史生くんの記憶が戻るまで気長に待つって」
「そりゃあ言ったけど……でももうこれ以上待てないの！つらいのよ、私だって」
私はそう言うと目の前のウイスキーのグラスを一気に空けた。カウンター越しにマスターが何か言いたげに私を見ている。
「なつき、あなたってひどいのね」
妙子は私をじっと見て言う。
「なつきは逃げるのね。傷ついた史生くんを置いて」
私も黙って妙子を見つめた。妙子は悲しいような切ないような複雑な表情をしていた。
そうか、そうだったんだ。妙子は私のことを心配してこういう顔をしていたんじゃない。妙子はいつだって史生のことを想っていたんだ。
やがて妙子が黙って立ち上がった。
「妙子」
私は空のグラスを握りしめてつぶやく。
「そんなに史生が気になるなら、あんたが付き合えば？」
妙子は振り返り、顔を赤くして唇をかみしめる。そして何も言わないまま、逃げるようにして店を出て行った。
「マスター、おかわり」
私はそんな妙子を無視するようにグラスを差し出す。
「なっちゃん。どうしてそんなこと言うの？」

マスターがタバコをくわえて私に言った。私は少し考えてこうつぶやく。

「史生には笑っていてほしいのよ。だから私といるより妙子といたほうがいいと思うの」

マスターは納得いかないような顔で、グラスに酒を注ぐ。私はただぼんやりと、店の薄暗い照明に光る、ウイスキーのボトルを見つめていた。

8

気持ちが悪い……胸がムカムカする……ビールとカクテルとウイスキーをちゃんぽんしたからだろうか……私は吐きそうになるのをこらえながら、足音をひそめて家の階段を昇った。

部屋に入るとバックを投げ捨て、ベッドに倒れこんだ。お酒を飲んですべてを忘れられればいいのに……史生みたいに……

しかし私の頭は冴えていた。泣きたくても泣けなかった。全然かわいくない。それに比べて妙子のあの切ない表情。私が男だったら、思わず抱きしめてあげたくなるようないじらしい瞳。

妙子は史生が好きなんだ。そして史生ももしかして……

その時私は、ふと何かを感じ起き上がった。隣の家の犬がワンワンと吠えている。「うるさいなぁ、あの犬。俺が来るたびにいちいち吠えるんだよなぁ」そう言って苦笑いした史生の顔がなぜか浮かんできた。

「史生？」

私は立ち上がりカーテンの向こうの窓を開く。夜明け間近の薄闇の中に、史生がこっちを見上げてぼんやりと立っていた。

「史生……」

私はそうつぶやいたきり何も言えなかった。史生も私を見つめたまま何も言わなかった。

薄闇の中に立つ史生はどこか透明な感じがする。このまま彼の記憶と一緒に消えてなくなってしまうのではないかと、私はぼうっと考えた。

史生は切ない目でじっと私を見つめていた。そして静かにうつむきゆっくりと振り返ると、何も言わないまま夜明けの道を歩き出した。

史生は私を見て、必死に何かを思い出そうとしていた。でもきっと何も思い出せなかった。

いいんだよ、史生。あんたが悪いわけじゃない。もう無理しないで……私もあんたのことは忘れてあげるから……
私は静かに窓を閉める。人間の涙とはこんなにあふれることができるんだ……いつまでも止まろうとしない涙に、私はあきれたようにかすかに笑った。

「あー頭が痛い。頭痛薬あったっけ？」
次の朝、台所の引き出しの中をごそごそとあさる私に、制服姿のあずさが言う。
「何よ？お姉ちゃん二日酔い？」
私はやっと見つけた頭痛薬を2錠、口の中へ放り込む。
「なっちゃん、あんたまた朝まで飲んでたんでしょう？史生くんと一緒だったの？」
母がエプロンで手を拭き拭き、あきれた顔で私を見た。
「いくら婚約者と一緒だからって、朝帰りはやめなさいよ？嫁入り前の娘が……ご近所の目もあるでしょう？」
「わかったわよ」
私はそう言ってグラスの水を飲み干すと、家族団欒のテーブルに向かって言った。
「そのかわりお母さんたち、史生のことを婚約者とかいうのはやめてよね」
母が驚いた表情で私を見る。あずさは牛乳をカップに注ぐ手を途中で止め、父は黙って新聞から目を離した。
「なっちゃん？どういうことなの、それ」
「どういうことって、そういうことよ」
私は流しの蛇口をひねる。目が覚めるほどの冷たい水が、私の手とグラスを冷やしてゆく。
「史生は婚約者でも恋人でもなんでもないから。ごめんね。お母さん、結婚式に着る服まで買っちゃったのにね」
母がじっと私のことを見つめている。私はそんな母と目を合わせ

ないまま、蛇口の水を止め、台所を出る。
まるで悲劇の主人公ね……心の中でどこかさめた私が、他人事のように笑っていた。

9

クリスマス、お正月、バレンタインデー……ひとり身の私には寂しい季節が通り過ぎる。

仕事帰りのバスの中、何度途中下車してあのアパートへ向かおうかと考えたことか……このまま何もなかったような顔をして、見慣れたドアをノックして、「お腹へったー」って笑って言えば、史生はきっと温かい料理を私に作ってくれるだろう。

記憶なんてなくてもいい。史生は史生なんだから……

だけど私はそれをしなかった。そんなことをしても、史生を苦しめるだけだから。

春を感じさせるような暖かい夜、ひとりで立ち寄ったあのバーで、マスターがポツリと私に言った。

「この前さ、史生くんが来たよ」

マスターはそう言いながら、私に何が入っているのかよくわからない、自慢の「マスター特製カクテル」を差し出す。

「妙子ちゃんと一緒だった」

私は特製カクテルをひと口飲んで笑った。

「マスター、逢引してる客のこと、そうやってべらべら他の客にしゃべってもいいもんなの？」

「なっちゃんだからしゃべったんだよ。なっちゃんは知っておいたほうがいいと思って」

マスターはそう言ってヒマそうにタバコをふかした。店の中には私以外の客はいない。そんなことはめずらしいことではなかったが……

「史生……元気だった？」

「うん。妙ちゃんと何か話しながら、楽しそうに笑ってたよ」

「そう」

私はカクテルを一気に飲み干す。

「おいおい、もっと味わって飲んでくれよ」
マスターはそう言って笑った。
妙子と史生か……悪くはないな……私はカクテルをおかわりしながら考える。なぜか今夜は穏やかな気持ちだった。私は変わったのだろうか……史生のことを忘れたのだろうか……

それから私は、マスターとどうでもいいような世間話をして、マスターの新しく開発したカクテルの毒見をさせられて、気がついたら明け方近くなっていた。
「またお母さんに怒られるよ」
「しょうがない娘だな」
「マスターのせいだからね」
私は笑って店を出た。
今日も私は酔っていなかった。べろべろに酔って、めちゃくちゃ泣けばかわいいのに……私ってかわいくないな、なんて思いながら、少し明るくなり始めた歩道を歩く。
車道を走る車はまばらで、信号機は点滅を繰り返す。商店街のシャッターは下ろされ、遠くでカラスが鳴いている。
空を見上げると夜の闇がだんだんと消え去り、今この瞬間、街に朝が訪れようとしていた。
私は大きく息を吸い込む。この空の色、空気の匂い……いつか感じたことがある……そうか、あれは初めて史生のアパートで、夜を明かした日のことだ。

前の晩にふたりで飲んで盛り上がって、史生の「うちに泊まってく？」の言葉に軽く「うん」と言った私。
でもなぜかふたりだけであの部屋にいると妙に落ち着かなくて、何度も観たことのある映画のＤＶＤを、ただダラダラと観て過ごして……「この黒人の俳優さんって何かの映画で見たね？」「うーん、何だっけ？」とか、くだらないこと話して……暇つぶしにビールを

飲んだらなんだか気分よくなってきて、私は史生にもたれかかって、今思えばかなり照れくさいことを言った。
「このままずーっと一緒にいられたらいいね」
史生は軽く笑って私の髪をなでたが、口から出た言葉はちょっぴり残酷だった。
「でも絶対とは言い切れないな」
私は顔を上げ史生を見る。
「何それ？あんたが浮気するかもってこと？」
「そういうわけじゃないけど。でもお前だってわかんないだろ？いつか心変わりすることがあるかもしれない」
テレビからは映画のエンディングが流れてくる。いつの間にか夜は更けて、春の夜明けがもうすぐそこまで来ていた。
「人生に絶対なんて言葉はないんだよ。人の心は変わるし、これから俺やお前に何が起きるかわかんないだろ？それが運命ってもんなんだよ」
「何よ、偉そうに。史生って意外と冷たいのね」
私はリモコンでテレビを消すと、史生の手を振りきり立ち上がった。
「帰ろうかな」
「え？泊まらないの？」
「もう朝じゃん。目、冴えちゃったから帰るよ」
部屋の外は薄明るかった。私は春の始まりの暖かな空気を思いっきり吸い込み、ゆっくりと歩き出す。やがてドアを閉める音がして、あわてた様子の史生の足音が聞こえてきた。
「怒ってるの？」
史生が私に追いつき顔を覗き込む。少し怒ってやってもいいかな？なんて思ったけど、必死な顔の史生を見たら、私は思わず笑ってしまった。
「怒ってないよ」
「よかった」

史生は安心したように笑って私の手を握る。史生の温かい手のぬくもりが、私の体にじわじわと伝わってくる。

「夜が明けるね」

「うん」

ふたりはそれだけ言って、手をつないで並んで歩いた。

あの日の空の色、空気の匂い、そして史生の手の温かさ。私の視覚も臭覚も触覚も、すべて忘れてはいない。

人間にはどうして記憶というものがあるのだろう。それがあるから私はつらい。だけどそれがあるから、人間は幸せにもなれるのだろう。

10

それから数ヶ月がたった真夏の午後、蝉時雨の公園で、私は史生にばったり会った。私はお盆休みをもてあまし、図書館で本を借りてきた帰りで、史生は妙子に会いに行く途中だった。

「元気だった？」

私は史生に言った。普通に目を見て話せる自分が、少し不思議だった。

「うん。なつきは？」

「元気元気。このとおり」

私は同僚と行ったダイビングで焼けた肌を、史生の前に見せ付ける。史生はそれを見て小さく笑った。

「妙子は元気？付き合ってるんでしょ、あんたたち」

私はそう言うと木陰のベンチに座った。史生も何も言わないまま、私の隣に腰をおろした。

ふたりの頭の上で蝉がうるさいほど激しく鳴いている。史生はしばらく黙り込んだ後、私に答えた。

「妙ちゃんは……元気だよ」

「そう」

私はかすかに微笑んでうなずく。

「なつきにはもう会えないって言ってる」

「何言ってんの。今度一緒に飲もうよ。3人でさ」

私は笑ったが、史生は笑わなかった。ただじっと考え込むように、遠くを見つめていた。

「俺、妙子のことが好きなんだ」

やがて史生がポツリと言う。

「なつきのことすっかり忘れて、こんなこと言ってる俺は虫がよすぎるけど……」

「ううん。そんなことないよ。それが今の史生の本当の気持ちなん

だから」
　私はそう言って史生の顔を覗き込む。史生はそんな私から目をそらすようにうつむいた。
「でもいつかはなつきのことを思い出すかもしれない。そしたら俺、妙子のことをずっと好きでいられるかどうか自信がない。なつきを傷つけて、妙子と付き合って……そして結局ふたりのことを傷つける」
　史生のやるせないような声を聞いて、私は胸が痛くなった。
「史生」
　私は言った。
「人生に絶対って言葉はないんだって。だからこれでいいのかどうかはわからない。これからまた史生も妙子も私も、どう変わっていくのかわからないし……でも今は、少なくても今は、これでいいんだよ」
「なつき」
　史生がゆっくりと顔を上げ私を見た。私はそんな史生の手をしっかりと握りしめる。史生の手は震えていた。帰るところがわからない子供のように震えていた。
「大丈夫。私はこの運命を受け入れられる。だから史生も自分の思うとおりに生きて」
　史生は黙って私の手を握り返した。私はそのぬくもりを決して忘れないように肌で感じ取ったあと、そっとその手を離した。
「もう行きなよ。妙子が待ってる」
　私はそう言って精一杯の笑顔で史生を見る。史生の目からは涙がこぼれていた。そしてその手が私の肩を抱き寄せたかと思うと、史生の唇は私の首筋に優しくキスをしていた。
　ああ、史生は忘れていない。私にいつもしてくれたキスを史生の体は忘れていない。でもこれからこのキスは、すべて妙子のものだ。史生はきっと妙子を抱きしめ、こうやってキスをするんだろう。
「じゃあね」

私はそう言うと立ち上がった。
「さよなら」
史生がつぶやく。私は史生に軽く笑いかけ、ひと気もまばらな公園を歩き出した。
もう涙は出なかった。ただ胸の中が熱かった。見上げると覆い茂る木々の隙間から真夏の空が見えた。
夏の間にこの街を出よう……私は熱でうなされたようにぼんやりとする頭で、そんなことを思った。

11

「買ってきたよ、お姉ちゃんの好きな生チョコ！一緒に食べよっ」
大きなケーキをぶらさげて、アパートに妹のあずさがやってきた。私が生まれ育った街を出て、ひとり暮らしを始めてから、４回目の夏が訪れようとしていた。
「なによ、あんたいきなり」
「今日誕生日でしょ？でもどうせ姉ちゃんは、ひとり寂しくビールでも飲んでるのかなーなんて」
「悪かったね。ひとりでビール飲んでて」
私はふくれっ面のまま、あずさの買ってきたケーキを広げる。確かにあずさの言うとおり、私はひとり寂しくビールを飲んでいた。でもそんなことはどうでもいい。あずさが来たかぎりは、一緒に朝まで付き合わせよう。
「たまにはうちに帰ってきなよ。お父さん寂しがってるよ？」
あずさがケーキを頬張りながら私に言う。
「そうだねぇ。でもバイト休むと生活苦しいからなー」
「そんなに金ないの？たまに休むぐらい平気でしょ？」
「うん。まあね」
私はこの街でバイトをしながら気ままに暮らしていた。知らない街の知らない景色は、私を思い出から開放してくれるから楽だ。
「最近どうよ？何か変わったことあった？」
私がビールを飲みながらあずさに言う。あずさは隣の犬が死んだことや、あの街に大型スーパーができたことなど、どうでもいいことを一通りしゃべってからこう言った。
「史生も引越ししたみたい」
史生の名前を聞いたのは、本当に久しぶりだった。
「この前たまたま、あのアパートの前通ってさ。なんとなく気になって１階の集合ポスト覗いたら、史生の名前がなくなってた。２階

を見上げても誰も住んでないみたいだったし」
「ふーん。妙子と同棲でも始めたかな？」
他人事のようにそう言った私に、あずさが抗議する。
「お姉ちゃん、悔しくないの！？史生はお姉ちゃんのものだったのに！」
「ものとか言わないでよ、ものとか。史生は誰のものでもないよ？史生は史生だもの」
あずさは何か言いたげに私を見た後、大きくため息をついた。
「お姉ちゃんのそういうクールな考え方、私にはわかんない。私だったら絶対史生を離さない。私が史生の記憶をよみがえらせてみせる」
あずさの言葉に私は笑った。そしてバカにしているわけでもなく、素直にこう思った。
「いいね。あずさは素直で気持ちがいい」
あずさはすねたような顔で私を見る。
「でも私はこれでいいの。今、別に後悔してないし」
私はあずさに笑いかける。あずさはじっと私の顔を見つめた後、静かに口を開いた。
「お姉ちゃん。私、結婚するのよ」
「結婚！？」
思いもよらないその言葉に、飲みかけのグラスを落としそうになった。
「できちゃったのよね、赤ちゃん」
あずさはそう言って、照れくさそうに自分のお腹をなでた。
「ホントに！？相手はあの彼氏？」
「うん。お姉ちゃんも知ってるでしょ。テニス部の先輩の」
「お母さんとお父さんはなんて？」
「最初はすごく怒ってたけど、今は結婚式楽しみにしているみたい」
「そう……」
私がつぶやきあずさを見る。あずさはためらいがちに顔を上げ、

私に言った。
「お姉ちゃん……私の結婚式に来てくれる？」
「もちろんよ。当たり前じゃない」
そして私はにっこり笑ってこう言った。
「よかったね。あずさ」
私の言葉に、あずさはやっと微笑んだ。

12

初夏の日差しが差し込む中、あずさは私たちが生まれ育った街の、小さな教会で結婚式を挙げた。

集まった家族も友人もみんな、少しお腹が目立ち始めた花嫁と花婿を喜んで祝福した。そしてその日のあずさは、私の記憶の中で一番幸福そうな顔で笑っていた。

結婚式の帰り、実家へ戻る両親と別れ、私はひとりあのバーに向かった。しかし店は封鎖されており、「長い間ありがとうございました」と書いてある紙切れが、一枚張ってあるだけだった。

潰れちゃったのか……マスターに会いたかったのにな……私が呆然と立ち尽くしていると、後ろから懐かしい女の声が聞こえてきた。

「なつき？」

私がゆっくりと振り返る。すると夕暮れの街を背に、赤ん坊を抱いた妙子が、じっと私のことを見つめていた。

「妙子じゃない。久しぶり」

私はそう言って笑うと、妙子に抱かれる赤ん坊の顔を覗き込んだ。妙子はどうしたらよいのかわからないような顔をして、子供を抱きしめ目をそらす。私はそんな妙子を見て、何も聞かなくてもすべてを悟った。

「赤ちゃん生まれたのね？結婚したんだ？」

妙子は黙って小さくうなずく。

「史生の子供ね？」

私の言葉に妙子は手で顔を覆った。

「やだ、どうしたのよ？私だったら全然平気だよ？結婚したなら教えてくれればいいのに」

「ごめんね……なつき」

妙子の声は震えていた。妙子は心から私にすまないと思っているのだろう。中学時代から彼女を知っている私にはわかる。

「だからー、謝ったりしないでよ。女の子？何ヶ月？名前なんていうの？」
私はそう言って赤ん坊の手にそっと触れた。小さくてか弱いその手が、私の指をギュッと握る。
「萌っていうの……今3ヶ月……」
「萌ちゃんかぁ、かわいい名前ね。ほら、この大きな目、妙子にそっくりだよ」
私の言葉に妙子が、ほんの少しだけ微笑んだ。私は黙って、妙子の腕に抱かれる萌を見る。
確かに目は妙子にそっくりだが、全体的には史生に似てるかな……史生はきっとめちゃくちゃかわいがっているんだろう……だって昔からあいつは子供が好きだったから。
そんなことを思っていたら、私の目から忘れかけていた涙が流れそうになり、あわてて妙子に笑いかけた。
「これからどうするの？私ヒマなんだけど、お茶でもどう？」
「ごめんね。実は私もこの子もちょっと風邪気味で……今病院行ってきた帰りなの」
「そっか。じゃあ早く帰って休まないとね」
私はそう言うと、もういちど萌の手を握ってから手を振った。
「それじゃ、お大事に」
私の声に妙子が顔を上げる。
「なつき……」
しかし妙子はそれ以上何も言わなかった。ただ切ない目で私のことをじっと見つめていた。私はそんな妙子に笑いかけると、ゆっくりと振り返り歩き出した。
街はすっかり夕日に包まれていた。妙子は私の背中を、まだあの切ない目で見つめているのだろうか。それとももう萌を抱いて、人ごみの中へ消えていっただろうか。私は少し考えて考えるのをやめた。

商店街からは焼き鳥のいい匂いが漂ってくる。買い物帰りの主婦たちが店の前で立ち話をしている。仕事帰りのサラリーマンは足早に家に向かって歩いてゆく。

しかし私は帰る場所を見失い立ち止まった。なんだか無性に寂しくなった。実家に帰れば父と母が温かい笑顔で私を迎えてくれるだろうが、今見たいのはその笑顔ではなかった。

その時車のクラクションが鳴り響き、私はぼんやりと車道を振り返った。目の前の横断歩道に赤い歩行者信号が点灯している。車道の向こうの信号の下には、退屈そうに信号待ちをしている人々の列。

そしてその中に私は、懐かしい史生の姿を見つけていた。

１２（後書き）

いつもお読みいただき、ありがとうございます。
１４日過ぎまで更新はお休みさせていただきます。
よろしくお願いします。

13

「史生……」
私はつぶやいたまま立ち尽くした。史生もじっと私のことを見つめていた。あの日と同じ空の色、風の匂い、青を待ちわびる史生の姿。私の頭にあの日の記憶がよみがえる。
「なつき」
史生の唇がそう動いた気がした。やがて信号が青に変わり、人々が横断歩道を歩き出す。史生もゆっくりと、しかしまっすぐに、私の元へ歩いてきた。
「久しぶり」
私はそう言って笑っていた。史生は私の前で立ち止まり、ただ黙って私を見る。そしてそのまっすぐな視線が、苦笑いする私にすべてを打ち明けていた。
今、あの日と同じこの場所で、なくした記憶をやっと取り戻したことを……
「何？買い物の帰り？」
私はそんな史生の視線を振り切るように目をそらし、その手に握られているビニール袋を覗き込む。
「ああ……うん。ビーフシチュー作ろうと思って……」
「そうだね。作ってあげなよ、妙子に」
私の言葉に史生は黙って顔を上げた。
「今そこで会ったのよ、妙子と萌ちゃんに。風邪気味なんだってね、ふたりとも」
史生は何も言わないまま、そっと私から目をそらす。
あたりは次第に薄暗くなり、オレンジ色の太陽が、最後の力を振り絞るかのように輝いている。私はそんな夕日を浴びる史生の横顔を、じっと見つめて言った。
「でも私と会ったことは妙子に言わないでね。あの子すっごく心配

性だから……史生が私を思い出して復活しちゃうんじゃないかって、きっと心配してると思う」
私は笑ったが、史生は黙ったままだった。私はゆっくりと史生の横顔から視線をそらすと、小さな声でつぶやいた。
「妙子と萌ちゃんと、幸せにね」
それが私の一番言いたかった言葉だった。私は人の幸せを壊す趣味はない。それだけ言ってかっこよくこの場を去ろうと思った。しかしそんな私の腕を史生がしっかりと握り締めていた。
「お前はどうなんだよ？」
私が黙って振り返る。
「お前は幸せなのか？俺を忘れて幸せになったのか？」
「当たり前でしょ。いつまでもあんたのことなんか想ってないわよ」
「じゃあ彼氏はできたのか？」
「そんなことあんたに関係ないじゃん！」
「関係あるね！お前を忘れた俺だけ幸せになるなんて、おかしいだろ！？」
私たちは道の真ん中で言い合っていた。
そういえば昔、史生があの事故に会う前、私たちはよくこうやってケンカをしていたっけ……思いっきり怒鳴りあっているうちに、いつもケンカの原因が何だったのかわからなくなってきてしまうのだ。まあそれほど、たわいのない原因だったのだろうが……
通りすがりの人たちが、そんな私たちを遠巻きに見つめている。はたから見たらバカバカしいカップルの痴話げんかに見えただろう。私は史生とこうやっている自分がなんだかおかしくて、いつのまにか笑っていた。
「何笑ってんだよ」
「別に」
「お前はすぐそうやって、笑ってごまかすんだから」
史生は小さくため息をつくと、何か思い出したようにかすかに笑った。

「何よ？あんただって笑ってる」
「いや、ちょっと思い出して……」
史生はそう言って私を見た。史生の頭に私と同じ記憶がよぎる。でもそれはもう、過ぎた過去なのだ。
「萌ちゃんって……かわいいね」
私は話をそらすかのように、そばを通りかかったベビーカーを見送りながらつぶやく。
「うん……」
史生はその言葉に素直にうなずいた。
「妙子と萌ちゃんを泣かせるわけにはいかないよね」
「そうだな……」
史生がそう言って遠くを見つめた。
商店街の向こうにマンションや住宅の明かりがぽつぽつと灯り始める。きっと妙子たちもあの明るい部屋の中で、史生の帰りを待っていることだろう。
「それじゃあ、早く帰ってビーフシチュー作らなきゃ。史生の大事な家族のために」
私が笑うと史生が言った。
「無理するなよ」
私はぼんやりと史生を見つめる。
「無理するな」
史生の言葉に私がうなずく。
「じゃあちょっとだけ、泣かせてね」
そして私の体は史生の胸に飛び込んでいた。
夏の始まりの風が、あの頃より少し伸びた私の髪を揺らす。史生の温かな手は、そっと私の背中を抱き寄せる。
大好きな史生。私はまだ史生のことを想っている。でもそれも今日でおしまい。本当の本当に、私はあんたを忘れることにする。あんたが妙子と萌のために、私を忘れると心に決めたように……
「ごめんな……なつき……」

史生のかすれた声が私の耳に響いてきた。

14

「それじゃあ……」
夕日が沈み、あたりが薄暗くなった頃、私はバス停の前で立ち止まった。史生のアパートに遊びに行った帰り、いつもこのバス停の前で私たちは別れた。
「元気で……」
「史生もね」
私がにっこり笑うと、史生も小さく微笑んだ。
やがて遠くに見えていたバスが、私たちの前で止まった。私はバスに乗り込み、窓から史生の姿を見下ろす。
史生は何も言わず、じっと私を見つめていた。バスがそんなふたりを引き離すように、ゆっくりと走り出す。
「史生……」
私は窓に張り付いて、思いっきり手を振った。史生もバスを追いかけるようにしながら、大きく手を振っている。まるで付き合い始めたばかりのふたりが、今日の別れを惜しんでいるかのように……しかしこの別れに「また明日」という言葉はない。
私はもう二度と史生に会うことはないのだ。
史生の姿が見えなくなった頃、私の目から再び熱い涙があふれていた。

私は今3人の子供を育てている。子育ては大変だが、子供にもそれぞれ個性があってけっこうおもしろい。
ひとつ年下で少しのんびり屋の旦那は、時々私を苛立たせるが、まあ仲良くやっているほうだと思う。つまり今の私はそこそこ幸せというわけだ。
妙子とは子供を連れて実家に帰った時、偶然あの街の大型スーパーで会った。ひとり娘の萌は今年中学受験で、いろいろ大変だと言

っていた。
「史生は元気？」と聞いたら、妙子は少し気まずそうに答えた。「2年前に別れた」と。そしてその原因は話してくれなかった。史生のせいなのか、妙子のせいなのか……それとも私のせいなのだろうか……
しかし妙子は笑顔で言った。「私には萌がいるから大丈夫」。そして萌と手をつなぎ、まるで姉妹のように仲良く人ごみの中に消えていった。
私は時々考える。史生は今どこにいるのだろう。何をしているのだろう。そして、誰を想って生きているのだろう……
しかしそんなことを考えても考えなくても、毎日の生活はあわただしく過ぎてゆく。私はちょっぴりほろ苦い記憶を胸の中にしまいこみ、これからもこうやって生きてゆくのだ。

１４（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

お気に入り登録してくださった方、評価を入れてくださった方、
本当にありがとうございます。

だいぶ前に書いたお話を投稿してみたのですが、
多くの方に読んでいただき、とても嬉しく思っています。

近いうちに新しいお話も投稿したいと思っているので
気が向いたらまたのぞいてやってください。
どうもありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6306m/

夜明けの街

2010年10月8日12時19分発行